２０２２年12月25日 会報142号	かわち野に吹く風	東大阪文化財を学ぶ会 会長　南　　光弘

歴史探訪　　「ナニワ今昔物語」

1．実 施 日　２０２３年１月26日（木）　雨天決行（荒天中止）
2．集合時間　９時（受付８時４５分）
3．集合場所　永田屋　昆布本店、八軒家船着場跡碑の前　　※緊急時 090-83759655（南）
　　地下鉄谷町線天満橋駅改札を出て、２号出口から地上に出る。みずほ銀行前の横断歩道を渡る
4．費　　用　270 円（適塾見学料）
5．持 ち 物　弁当（軽食）を持参。または、大阪市役所食堂中之島図書館食堂などを利用。雨具など
6．行　　程　全行程徒歩約 7～8ｋｍ

八軒家船着場跡→坐摩神社行宮→釣鐘屋敷跡→大坂銀座跡→里程元標跡→泊園書院跡→少名彦神社→適塾→木村長門守重成表忠碑（中の島中央公会堂、大阪市役所の近く・昼食）→懐徳堂跡→御霊神社→北御堂ミュージアム→坐摩神社→南御堂（芭蕉終焉の地）　解散予定　午後３時

①　八軒家船着場跡～京阪間を結ぶ舟運のターミナル～

平安～鎌倉時代、付近一帯は「渡辺津」と呼ばれ、京から舟で下った熊野詣の一行はこの地から陸路を歩んだという。熊野街道の始点を示す石碑は、船着場のすぐ西を南に延びる道に建つ。かつては大勢の人々が列をつくってここを出発点に、熊野詣でへ出かけていたという。

江戸時代には「八軒家浜」と呼ばれ、三十石船や淀川の荷客輸送にあたった長さ約 17m の過書船の発着場として賑わっていた。大坂と京都・伏見間約 50 ㎞を結ぶ発着点の一つ。京都から八軒家についた客は、西に進めば大坂の町へ、南に行けば熊野街道に出ることができる。水運と陸運をつなぐターミナルと言える。上りの八軒家から伏見までは一日を要し、下りは半日で目的地に着いた。船賃は上り 144 文、下りは 72 文だった。最盛期の享保７年（1722）には、往来する船数は 740 艘を超えたという。

「八軒家」という地名の由来は、昔ここに八軒の船宿があったからという。乗降客をめあての宿だけでなく饅頭売りの商売人が集まり、八軒家はいつも人でごった返したという。

≪平安時代より続く道熊野街道≫～大阪が街道の出発点～

京都から大阪を経て、熊野権現の分霊を祀った九十九（つくも）王子をたどりながら、熊野三山へ至る道。それが「熊野街道」。

平安時代中期から鎌倉初期にかけて王朝貴族を中心に熊野信仰が盛んになり、中でも、後白河（ごしらかわ）上皇は 34 回、後鳥羽（ごとば）上皇は 28 回も行幸（ぎょうこう）した。やがて、武士や庶民にまで信仰が広がり、大勢の人々がこの街道を往来したことから「蟻の熊野詣」と呼ばれた。

熊野詣の道は京都から船で淀川を下り、渡辺津（現・八軒家船着場跡付近）に上陸。九十九王子の最初の王子、「渡辺（窪津）王子」で旅の安全を祈願して、御祓筋（おはらいすじ）を南下することから始まる。

天満橋の交差点から土佐堀通の南側を西に進むと、八軒家船着場跡の石碑。それを通り越すとすぐ御祓筋である。角に熊野街道出発地の石の案内板がある。ここが熊野街道のスタート地点である。土佐堀通をさらに西に進み、１筋めをすぐ南へ曲がると、渡辺王子があったとする説が有力な坐摩（いかすり）神社行宮（あんぐう）がある。本町通、中央大通を越えると南大江公園。このあたりに、２番目の王子「坂口王子」があったと伝えられている。ここから街道は、海岸線・崖があったとされる場所を避けるように上町台地へと向かう。

旅の目印だった「榎大明神」の一つ前の通りを東に入り、谷町筋を越え、最初の筋を南へ。四天王寺まで道が続く。３番目の王子「郡戸（こうと）王子」と４番目の王子「上野王子」はこの間にあったと伝えられて

いる。それぞれの跡であると思われている場所に、石碑が建てられている。四天王寺から谷町筋を下り、阪堺電車を横目に見ながら阿倍野筋を歩き、松虫通付近から旧街道が残る道に進むと、大阪府下で唯一現存している王子社「阿倍王子神社」に到着する。街道は住吉大社、泉州・泉南市の「厩戸王子」を経て、古より受け継がれてきた世界遺産までつながっている。

② 釣鐘屋敷跡 ～今も鐘の音で時を報せている～

釣鐘屋敷の釣鐘は重さ3t 高さ 1.9m。3代将軍徳川家光が寛永 11 年（1634）、大坂城を訪れた際に、三郷惣年寄などが相率いて将軍を今市（現旭区今市町）に迎え、酒樽・鰹節を献じ、祝賀の意を表したところ、大坂町中の地子銀（じしぎん・固定資産税、1ヶ年 178 貫 934 匁）の永久に免除することを約束、感謝した町民が後世子孫までこの恩恵を忘れないために、釣鐘を鋳造し、釣鐘屋敷を建てた。釣鐘は1日に 12 回ならされ、時報の役割を果たしていた。

近松門左衛門の浄瑠璃『曽根崎心中』に出てくる「暁の鐘」はこの鐘のことである。現在の天満橋から梅田辺りまで鐘の音が聞こえたという。

鐘楼は江戸時代を通じて、4度の火災（万治、宝永、享保、天保）に見舞われたが、これをくぐり抜けたが、明治3年（1870）に撤去され、釣鐘はその後、幾度か場所を移動し、大正 15 年（1926）以降は大阪府庁屋上に「大阪町中時報鐘」として保存されていた。

昭和 60 年、地元有志の努力によって、再び元の釣鐘屋敷地へ戻された。鐘楼も斬新なデザインで新たにつくられた。釣鐘は 380 年以上経った今も現役。1日3回、鐘の音で時を報せている。

③ 摂津国一之宮、坐摩（いかすり）神社行宮（造替中）と坐摩神社（久太郎町）

神社の歴史は古い。神功皇后が新羅に遠征して帰って来た折に、淀川南岸の渡辺の地（天満橋の南方）に、

坐摩神社の祭神、生井神（いくいのかみ）福井神（さくいのかみ）綱長井神（つながいのかみ）波比祇神（はひきのかみ）阿須波神（あすはのかみ）、5柱合わせての総称、坐摩神を祀ったことにはじまるという。

ここ、坐摩神社行宮（境外末社）は、『現地案内板』によれば、天正 11 年（1583）豊臣秀吉の大阪城築城に際し、城域に当たるため、中央区久太郎4丁目に遷座したが、それまでは当地に鎮座していたという。

そもそも坐摩神社は、延長5年（927）に完成した法令集である『延喜式三巻』の「臨時祭式」に、「凡坐摩巫（いかすりのみかんなぎ）。取都下国造氏童女七歳已上者充之。若及嫁時。申弁官充替」と見られる「都下国造」は「闘鶏国造」と考えられる。朝廷は明らかに坐摩神を祀る巫は『都下国造』の娘でなければならないと規定している。

大田 亮博士は『姓氏家系大辞典』において、「坐摩神は、もと都祁の地にあって、当闘鶏（つげ）国造が奉斉して居たが、仁徳朝に氷を献じ、天皇がお歓びになった事から、此の神を天皇の都の地なる難波に遷し祀る事となり、闘鶏国造の一族が相変わらず此社に奉仕した。その後、仁徳天皇が崩御されて、都は大和や山城に遷ったが、此の難波京の地にある坐摩神は、井戸の神だと云う処から、八神殿などと共に宮中にも祭られ、難波の地にも残り、古い縁故より坐摩巫は難波の地に移った。此の国造一族から出すことになったものと思う。」と述べている。

都祁（つげ）の氷室神社は、創建は 1400 年前。『日本書紀』の仁徳天皇 62 年の条に額田大中彦皇子（応神天皇の皇子）が闘鶏の地に狩猟に来た際、初めて氷室を発見し、以後、御所に氷を献上し氷室の神を祭ったのがはじまりとされている。祭神は、闘鶏稲置（つげいなぎ）大山主命、大鷦鷯命（おおささぎ）、額田大中彦命。

坐摩（いかすり）の語源は諸説あるが、土地又は居住地を守る「居所知」が転訛か。

≪坐摩神社≫

坐摩神社本社には、特徴的な「三つ鳥居」が建っている。

陶器神社・拝殿の格天井 18 枚の額皿が飾られている。また、境内にある有田焼の灯篭、清水焼の吊り灯篭、信楽焼の水鉢など、焼き物の里から奉納された陶磁器を見ることができる。

④　大坂銀座跡　～江戸・銀座より４年早い～

銀座とは、江戸幕府の銀貨の鋳造・発行所のこと。徳川家康が慶長６年（1601）、伏見で堺の銀商・大黒常是に鋳造させたことにはじまる。伏見では、銀の品位を決め、通貨を製造していたが慶長 13 年（1608）には、現在の京都市中京区に移された。時を同じくして大坂にも銀座ができたが、通貨は製造せず、主に、生野・岩見銀山の産銀や粗銅から抽出した銀（「灰吹銀」、住友長堀銅吹所・銅の精錬所）を京都に回送していたようだ。

銀座は、静岡と長崎にもあり江戸の銀座は慶長 17 年（1612）に駿府から移されたもの。全ての銀座は明治元年に廃止され、３年後には造幣局が創設され貨幣の製造を開始した。

⑤　里程元標跡　～江戸時代の道路起点～

里程とは、道のりのこと。当時、高麗橋付近は大商人たちが商いを行い、近畿圏の経済の中心となっていた。道路の起点は高麗橋からとし、道のり計算のスタート地点は、橋の東詰めにあり、京街道・中国街道・紀州街道など諸国への距離を測るときや、車馬賃を算定するときの起点となっていた。

明治９年（1876）道路制度公布により、引き続き里程計算の起点となり、高麗橋の東南詰に元標が建てられ、「東京日本橋まで、143 里 20 丁、京都三条大橋まで 13 里 12 丁、神戸元町まで９里 35 丁と刻まれた。現在は道路元標として梅田新道交差点西北角に移されている。また高麗橋は、豊臣秀吉の大坂城築城の頃、外堀に架けられたと伝えられている。名の由来は朝鮮通信使を迎える客館・高麗館（こまのむろつみ）があったからという。また、江戸時代、公儀橋のなかでも重視され、西詰には町奉行所の制札場があった。なお高麗橋は大阪で最初の鉄橋（明治３年）である。昭和４年に擬宝珠の飾りや櫓屋敷を模した高欄が設けられた鉄筋コンクリート造の橋に架け替えられている。

⑥　泊園書院跡　～大坂漢学の拠点～

儒学者・藤沢東畡（ふじさわとうがい）が文政８年（1825）、大坂に出て泊園書院を設立。当時、民衆に漢学を教えた私塾である。東畡の別号が「泊園」。「泊園」は利欲にとらわれないという意味である。

東畡は６歳で大抵の漢字を読んだ秀才で、七絃琴の名手。風雅を愛し、泊園の名のとおりの生涯を送ったという。この精神は南岳（なんがく）、黄鵠（こうこく）、黄坡（こうは）と４代 140 年間守られた。

現在、石碑が建つ場所に塾が移されたのは南岳の頃で、明治９年（1876）。

南岳は一時、途絶えていた泊園書院を明治６年（1873）に再興。やがて最盛期を迎え、塾生は 100 名に達したという。江戸から続いた泊園書院は、昭和 24 年（1949）、黄坡の死により幕を閉じた。

その間に蓄積された２万冊余の蔵書は、現在、関西大学に泊園文庫として保存されている。また一族から昭和の流行作家、藤沢桓夫（ふじさわたけお）や石濱恒夫（いしはまつねお）が出ている。

⑦　日本医薬総鎮守・少名彦神社　～神農さんと呼ばれた～

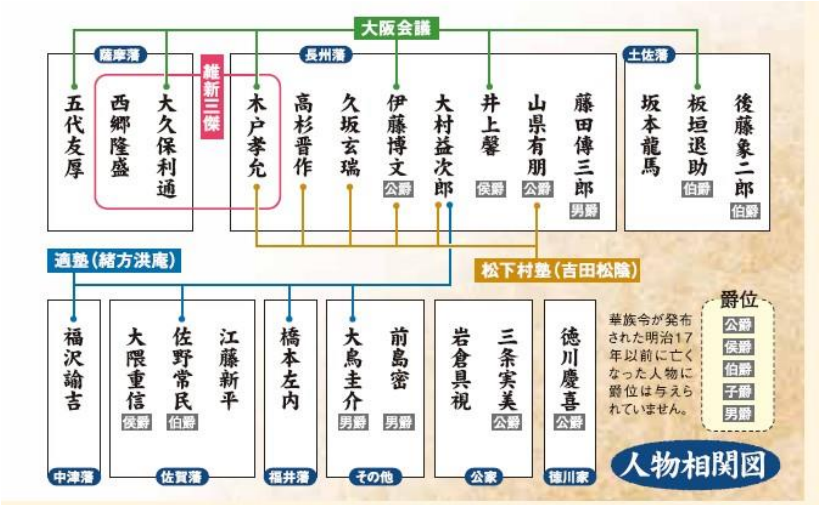
薬の町、船場道修町（どしょうまち）に鎮座する少名彦神社。祭神は少彦名命（すくなひこなのみこと）と神農さん（炎帝神農・えんていしんのう）。

少名彦命は、大国主命（おおくにぬしのみこと）とともに国造りをされたとされる神様。常世の神、医薬・まじない・温泉・酒造の神など多彩な能力を持つ神ともいわれている。また、は最古の本草（医薬書）「神農本草経」の書名にも冠されている炎帝神農は、古代中国の伝承に登場する三皇五帝の一人で、人々に医療と農耕の術を教えたといわれている。

ここ大阪道修町は豊臣時代頃から薬種取引の場として薬種業者が集まるようになっていた。薬は 人命に関わるものであり その吟味は大変難しいものがある。そこで 神のご加護によって職務を正しく遂行しようと安永９年（1780）京都の五條天神宮より少彦名命を勧請し、以前より祀っていた炎帝神農とともに祀ったのが始まりという。

江戸末期の文政５年（1822）大坂でコレラ（虎狼痢）が流行した際、虎の頭骨などの和漢薬を配合して作ったのが「虎頭殺鬼雄黄圓（ことうさっきうおうえん）」という。病名と薬に「虎」の字が当てられていた

ことから「張り子の虎」がお守りとして薬とともに配られ、それ以来、張り子の虎は家内安全無病息災の独自のお守りとして全国に広まった。



⑧　適塾　～蘭学、蘭方医学のメッカ～

蘭学者・医者として知られる緒方洪庵が江戸時代後期、天保９年（1838）に大坂・船場に開いた蘭学の私塾。正式には適々斎塾（てきてきさいじゅく）という。また、緒方洪庵の号である「適々斎」が名の由来の適々塾とも称されていた。幕末から明治維新にかけて活躍した人材を多く輩出し、現在の大阪大学医学部の前身とされている。福沢諭吉や大村益次郎、大鳥圭介、橋本左内、佐野常民などを輩出した。

緒方洪庵は、文化７年(1810）備中足守藩で生まれる。父は足守藩士であった。16 歳の時、足守藩大坂蔵屋敷留守居役になった父に伴い、大坂に来る。中天遊の私塾に入門し、蘭学、蘭方医学を学んだ後、江戸に留学。天保９年（1838） 長崎での勉学を終え、大坂に戻り、瓦町に蘭学塾『適塾』を開く。

適塾は人気があり、生徒を収容できなくなったので過書町に町屋（現在の北浜３丁目）を購入し、古手町に種痘所を開設した。この頃に、中小坂村の芦田愛次郎（梅三）が諭吉を頼って適塾に入門している。20 才の春という。適塾でオランダ語と牛痘種痘法を学んだあと、医者として天然痘予防のために尽力している。また、芦田愛次郎は、紀ノ川の華岡清州のもとに赴き麻酔術も学んだ。

⑨　木邨（木村）長門守重成表忠碑　～大坂夏の陣、若江堤で井伊直孝と戦った若武者～

木村長門守重成の忠節を表す碑。元はここに豊国神社があり、そこに建てられたものだった。豊国神社が大阪城内に移転したため、これだけが残された。

生年は不詳。父は地侍木村三郎左衛門か、木村常陸介重茲の養嗣に、自刃後（重成３歳）江州の太守、佐々木義郷に養育される。後に許され、母・宮内卿局が秀頼の乳母、重成は秀頼の近習になる。秀頼と「乳兄弟」「幼なじみ」であり、信頼関係で結ばれていた。

長門守は、「丈高く、細い眼のまなじりが凛と上がった美丈夫、面立ちに気品が感じられる」と、大坂城中の女官達の胸を騒がした。大阪冬の陣、今福の戦いが初陣。佐竹義宣や上杉景勝らの軍勢を破るなど、『沈勇の士』（ 智・仁・勇の三徳を兼ね備えていた若武者）といわれ、幾つかのエピソードを残している。特に有名なのは、首実検の際、家康をはじめ井伊直孝ら並み居る武将らは「切られた兜の忍ぶ緒」「匂い立つ香り」に言葉を失い、長門守の優雅な嗜みを褒め讃えたのである。

⑩　懐徳堂跡 ～町人によってつくられた塾が誕生～

享保９年（1724）、三宅石庵（みやけせきあん）と中井甃庵（なかいしゅうあん）を教授に迎え、５人の町人が出資して、町人のための私塾、懐徳堂を創設。教養としての学問ではなく、実用的な学問を教えた。朱子学を中心としながら、各派の説も取り入れる自由な学風は、大坂人に合っていたといわれている。２年後、甃庵らの奔走により、幕府から大坂学問所として公認された。なお、懐徳堂の名の由来は不明。

≪商売人本位の規則≫

武士が幅をきかせていた江戸時代にあっても、大坂では武士は人口の１割にも満たず、民主主義の精神があった。懐徳堂では、武士が教室の上座に座る習慣をなくして自由にした。貧しくても学ぶ意欲があれば講義に出席できるようにし、商人の都合に合わせて早退、遅刻もできた。当時は「商売」をさげすむ風潮が強かったが、懐徳堂では「商売」を評価し、何よりも大切な「人の道」を説いた。やがて全国でも有名な塾へと発展を遂げ、山片蟠桃（やまがたばんとう）はじめ多くの知識人を輩出した。

140 年以上の歴史を築いた懐徳堂は明治２年（1869）、閉塾に追い込まれたが、大正５年（1916）、場所を移し再建された。「懐徳堂旧跡の碑」は、もとの懐徳堂の地に建てられている。

⑪　御霊神社　～浪速の氏神～

祭神は、天照大神荒魂（瀬織津比売神）、津布良彦神、津布良媛神、応神天皇、源正霊神（鎌倉源五郎景政公霊・桓武平氏の流れ）

鳥居横の説明板には、「創建は古く、800 年代後半。大阪湾が深く入り込んで葦が繁る円形の入り江に祀られた圓（つぶら）神社（神祠）に始まり、古来大阪市の船場、愛日、中之島、土佐堀、江戸堀、京町堀、靭、阿波堀、阿波座、薩摩堀及び立売堀、長掘の西部、南北堀江の西部等旧摂津国津村郷の産土神として、信仰の中心になっていた。」「御神威高く、上古　天皇御即位の大嘗祭に続く八十嶋（やそしま）祭に預かり給い、後に土地が次第に固成して村を形成し、その名も津村（つむら）と転訛した。」という。

文禄３年（1594）圓江（つぶらえ・現在の西区靭）から現在地に鎮座し、江戸時代に御霊神社と改称した。船場言葉の御寮人（ごりょうさん）と語呂が似ていることから「御霊さん」や「御霊はん」と親しみを持って呼ばれてきた。船場という土地柄、商売の縁を結ぶ「縁結びの神様」としての信仰も篤い。

⑫　津村別院・北御堂（ミュージアム）　～大坂誕生に立ち会った宗派～

浄土真宗本願寺派と大坂の関係は古い。本願寺第８世・蓮如（れんにょ）が明応５年（1496）に「摂津国東成郡生玉之庄内大坂」、今の大阪城あたりに一宇の坊舎を建立したのが始まりとされる。

織田信長との合戦のあと焼失し、天正 19 年(1591)には豊臣秀吉の寄進により京都に本山が移転する。

津村別院は当初、「津村御坊」の名で慶長２年（1597）につくられた。江戸時代は、その南側に１年後に建てられた難波別院とあわせて「御堂さん」として親しまれた。

大阪を南北につらぬく御堂筋の名前は、北御堂・南御堂と呼ばれたこの２つの別院に由来している。名付け親は元大阪市長・關一（せきはじめ）だという。大阪を南北に貫く御堂筋は、全長 4.027km.幅 43.6m。これ程立派な道になったのは、実は昭和１２年のこと。それまでの道は幅 6m ほどの細い道だった。

この周辺の船場（北は土佐堀川、南は長堀川、東は東横堀川、西は西横堀川に囲まれた範囲）と呼ばれる場所は、江戸時代の商人たちに「御堂さんの屋根の見えるところで、鐘の音の聞こえるところで商売がしたい」とまで言わしめた、ステイタスのある場所であった。

商業都市としての隆盛を誇った大坂の町が、そのまま現在の大阪へとつながっていることを考えれば、御堂さんの果たした役割が理解できる。

≪北御堂ミュージアム≫

本願寺と大阪の関わる諸資料を収集、調査して展示している。大阪の歴史が分かり易く丁寧に展示されており、大阪の発展と、浄土真宗・北御堂とのつながりを見ることができる。

⑬　難波別院・南御堂（芭蕉終焉の地）　～正式名称は真宗大谷派難波別院～

文禄５年（1596)、真宗大谷派の開祖である第 12 世・教如（きょうにょ）が、現在の北区の天満橋と天神橋の間に位置する「渡辺の地」に大谷本願寺を開創したことに始まる。しかし、天正 11 年（1583)、豊臣秀吉（とよとみひでよし）が石山本願寺跡に大坂城を築城。城下町を整備していくにあたり、石山本願寺に隣接して建っていた大谷本願寺は、秀吉の命により慶長３年（1598)、現在地に移転した。

総本山としての機能は、慶長 7 年（1602）に徳川家康の寄進によって京都に東本願寺が建立されるまでで、それ以降難波別院は、大坂第一の拠点寺院として地域に親しまれた。

≪俳聖の辞世句を訪ねる≫

元禄期の俳聖・松尾芭蕉（まつおばしょう）が元禄 7 年（1694）に没したのが、難波別院の向かいの花屋の座敷であったことから、その辞世の句（「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」）が刻まれた石碑が、難波別院の境内に建てられている。これは天保 14 年（1843）の芭蕉 150 回忌にあわせて、当時の俳人たちが建立したとのこと。

東大阪豊浦の勧成院にある句碑「菊の香にくらがり登る節句かな」は、寛政 11 年（1799）芭蕉没後

100 回忌の追福のため建立したもの。死の一ヵ月半前の９月９日、伊賀から大坂への旅の途次暗峠にての句。「菊の香や奈良には古き仏達」などと同じ日の作。なお、「芭蕉終焉の地碑」は御堂筋の緑地帯の中にある。

≪寄稿文≫　　久保下さん追悼　　東京湾岸で　　壱岐一郎

彼女の後半生 20 年のお付き合い、藤田友治兄の遺した『ゼロからの古代史事典』の編集スタッフとしての活躍が見事だった。2012 年、東京でも再販が売れたが、10 年後の今もその光は失せない。旧石器時代から奈良時代の前までの通史、約 40 項目、400 頁を 15 人が執筆したが、女性は彼女と藤田美代子さん２名、自分の担当項目他、索引や帯の PR 文を書いている。藤田兄急逝後 7 年、主編の伊ケ崎兄ともども、編集に大苦労、彼女の奮闘は目覚ましいものだった。たまたま、新大阪駅前の「ほっと・サポート」事務所とぼくの工房が徒歩５分の条件も良かった。発行元、山科のミネルヴァ書房への出張にも便利だった。

ぼくは東京・滋賀・金沢・仙台・福岡・北京・沖縄・大阪と転々の 50 年を過ごしたが、70 代大阪の単身生活は印象深い。振り返ると、久保下さんは昔の言葉で「勤労インテリゲンチャ」で高卒後に猛勉強した人だった。文章力と突進力が抜群、ぼくらは腰が引ける「哲学」に敢然と向かい、哲学や歴史の会の事務局を務め、ペーパーの編集をこなしてきた。

ぼくが頼んだ古代史の会は、朝日新聞西宮の支局を借りた「謎の扶桑国」の発表だった。20 人ほどが集まってくれ、あの記者銃殺事件の犠牲者供養にもなった。彼女はさりげなく幹事役を務めてくれた。まさに「得難い友人」だった。車の運転もまめで熟練者、車の中でお孫さんの話に感銘を受けた思い出がある。

パソコンでお世話になったが、大きな成果は「広域邪馬台国・棋譜イラスト」だ。３世紀・魏の曹操の兄の棋譜（当時 17 道）が遺っている事実を知り、彼女と加藤さんのコンビに依頼して実現したのだ。通称・「倭人伝」に記された１０を超える数字・方角で邪馬台国位置問題を満足させるイラストに出来上がった次第、改めて感謝。痛みのない天国でやすらかに　　敬白

≪寄稿文≫　　久保下多美子さんへ　　清水守民

八年程前の筑紫史跡めぐりの時はお世話になりました。唐留学から帰国した空海は、この筑紫の地で一年間消息不明となりました。その後彼は関西に帰り、ご存知日本の歴史・文化を塗り替えるほどの大活躍。今も高野山奥ノ院に静かに眠っています。私が久保下さんに「ひょっとしたらあの『親魏倭王』の金印も一緒に眠ってるんじゃないかな」と言ったら、「私もそう思う」って言いましたね。

今（特に）大阪はコロナ禍で、この３年間足を踏み入れておりません。これがいつ収まるものかわかりませんが、その時にはまた関西史跡めぐりを始めたいと思います。で、そこに久保下さんがひょっこりと顔を出すかも知れませんね。またお会いしましょう。

≪お知らせ≫

1. 新春古代史講座　大討論会　テーマ「九州王朝説」は成立するか

☆開催日時　１月２８日（土）１時２０分から４時 30 分

☆場　所　　大阪商業大学　谷岡記念館多目的室　※商大には直接問合せはしないでください。

☆参加費　　500 円

僅かな時間内で論議する論点として、王朝・古代天皇制の成立、存続の有無、その立証のために具体的には①宮都と古墳の存在と意義、②倭の五王と倭國の多利思北孤（たりしひこ）について論議します。なお、他の視点からの論議も考えられます。予めご了承ください。

論者は、お馴染みの内倉武久さん、山科威さん、清水守民さんです。

2．２月の歴史探訪予定　　2月 28 日（火）集合 9時　ＪＲ和泉砂川駅

熊野街道歴史散歩

主な見学先、眞如寺、（熊野街道）、長慶寺、信達宿本陣跡、大苗代、厩戸王子跡、岡神社、海会寺、古代史博物館、樫井古戦場跡　など

３月 29 日は、湖北方面のバスツアーを予定しています。

３．ミニ歴探＆サロン

２月４日（土）　奈良豊澤酒造を訪ねます。詳しくは「歴史と街かど」で検索して下さい。